

---

ヤン・ファン・エイク作《ファン・デル・パーレの聖母子》

— 鸚鵡の象徴性と注文主の救済願望 —

---

《ファン・デル・パーレの聖母子》（ブルッヘ、市立美術館）は、ヤン・ファン・エイクが制作した中で最大規模を誇ると同時に、注文主と完成年が共に判明している貴重な作品である。下枠銘文が語るように、ブルッヘのシント・ドナース聖堂の聖堂参事会員であったヨリス・ファン・デル・パーレが、同聖堂内で永代のミサを挙げるための司祭職を創設する許可を得たことを契機としてヤン・ファン・エイクに依頼し、1436年に完成された。

本作品の先行研究は、主として機能論と図像学的検証の二つの傾向に分類される。特に1965年のヴィエヌの論考において従来の祭壇画説に疑問符が付され、新たに墓碑絵画説が提唱されて以降は機能論が隆盛を極めた。その一方で、図像表現と作品成立背景に着目した検討は御座なりにされてきた感が否めない。このような状況を鑑み、発表者は従来その存在は知られていたものの、作品研究に用いられてはこなかった注文主に関連する教皇勅書の重要性を考慮した上で、本作品の中でも特異且つ説明困難とされてきたモチーフについて、新たな解釈を試みる。本発表で取り上げるモチーフとは、聖母子が抱く鸚鵡である。

古代より、鸚鵡は人語を話す雄弁な鳥として博物誌や世俗文学の中で讃えられてきた。一方、「アヴェ」と鳴くと考えられたことから、キリスト教的文脈においては受胎告知における大天使ガブリエルのマリアへの挨拶と関連付けられ、マリアの処女性や無原罪性、神の御言葉の象徴など、複数の意味を帯びることとなった。しかしながら、本作品に描き込まれた鸚鵡に言及した論考では、鸚鵡に関する典拠に立脚した一般的解釈にとどまり、作品の成立背景に配慮した詳細な検討は未だ試みられていない。以上を踏まえた上で、発表者は本作品の鸚鵡が担う固有の意味は、その構図上の特殊性と注文主の意図の双方に着目することで初めて浮かび上がってくると考える。鸚鵡の姿は中世の動物寓話集の挿絵や装飾写本の余白部分に数多く見出すことは出来るが、本作品のように、恰もその胎に寄り添うかの如く聖母マリアの膝の上で羽根を休めている先行作例は認められない。更に、後世散見される「鸚鵡を抱く聖母子」図像とも異なり、受難を象徴する「十字花」と呼ばれる花に並置されている点でも特異である。これらの特徴から、本作品の聖母子が抱く鸚鵡は、大天使ガブリエルの挨拶を通して神の御言葉が肉となりマリアの胎に宿った受肉の神秘を、イエスの受難のはじまりの示唆と共に象徴していると考えられる。更に、この鸚鵡の象徴性は、本発表で初めて検討を試みる注文主の救済願望と密接に結び付くという仮説を合わせて提示する。

《ファン・デル・パーレの聖母子》に描かれた鸚鵡について、表現と史料の双方から新たな考察を加える本発表の試みは、作品研究のみならずヤン・ファン・エイクの象徴言語体系に新たな光を当てることにも寄与すると考える。